

---

# アグナド番外編

口ノ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アグナド番外編

### 【Nコード】

N7489G

### 【作者名】

ロノ

### 【あらすじ】

アグナドと関係があってもアグナドの本編では語られることのない、そんな人々の物語を綴ります。

新緑の王（ファレイ）（前書き）

この新緑の王では第二部の主人公候補の物語です。

実は、この主人公アグナドの世界の人ではありません（笑）

## 新緑の王（ファレイ）

とある時間、場所のとある孤児院。  
いつも通り平和だった孤児院に変化が訪れる。

「みんな新しいお友達だ、仲良くしてあげなさい」

院長が新しい子供を連れてきたのだ。

「その必要はない」

透き通った声がその場に響き、院長の後ろから子供が現れる。やせ細っており、栄養状態が悪そうな体つき、森がそのまま人になったかのような薄緑色の髪、深い緑の瞳。その瞳が周りの人々を捉える。

「我は新緑<sup>ファレイ</sup>の王、我に関わると」

死ぬ。

その瞳には希望も生气もなかった。

\*\*\*\*\*

ファレイはいつも孤児院の近くにある草原に座り空を眺めていた。

その傍を孤児院の子供達が通る。

「なあ、見たか？」

「うん、見たよ」

子供達がファレイをチラチラと盗み見ながらヒソヒソと話をしている。

「また、死んだって」

「うん、あいつの面倒を見ていた人が死んだらしいね」

ファレイにそれが聞こえる声で子供達が話す。それを聞いてファレイが勢いよく立ちあがる。

「我は何もしていない！ 我に関わると死ぬと忠告したのに、我と関わったからだ！」

「ファレイが喋った！ 殺されるぞ！」

ファレイが声を荒らげて怒鳴ると、子供達は一目散に孤児院へ逃げに行った。

「我は……殺してなんか、いない　っ」

\*\*\*\*\*

その日もファレイは草原で空を見ていた。そこに一人の少年が近寄ってくる。

「なあ、お前何してるんだ？」

「我に話しかけるな」

話しかけた少年に冷たく接する。自分に興味を持たせないためだ。

「オレはイット、お前は？」

「……ファレイ」

名乗ったのだからさっさと行けとファレイはそっぽを向き態度で示す。それでもイットは話しかけてくる。

「なあ、オレ来たばかりで友達いないんだ。友達になってくれよ」

「……我に関わる者は皆死ぬ、2週間以内にな。お前もそうなる、我に関わるな」

それを聞くとイットは面白そうだとニヤリと笑う。

「それじゃあさ、オレが2週間以内に死んだらお前の勝ち、オレが生きていたらお前の負け。そしたら友達になってくれよ」

「……我に何の利益がある。」

命を遊びのために危険に晒すイットをフアレイは横目で睨む。

「そうだなー、俺が死ぬとわかったら、死ぬ前に出来ることなんかしてやるよ」

「……勝手にしろ」

そう言うとフアレイは孤児院に戻っていく。

「おう！ 勝手にさせてもらっぜー！」

ファレイの後を追うようにイットも孤児院に戻った。

\*\*\*\*\*

あれ以来、毎日イットはファレイと共に過ごした。ファレイもイットの前でだけ少しだが穏やかな顔をし、生気に満ちた瞳をしていた。そんな日々が続くとファレイは思っていた。

「もうあれから3週間くらいたったぜ！ オレの勝ちだ！」

「わかった、我の負けだ。」

ファレイが苦笑いで負けを宣言すると、イットは嬉しそうに笑う。

「オレ達、友達だよな！」

「ああ、お前は我の初めての友達」

平和な日々が続くと誰もが確信したのに、悲劇は起こってしまった。



「イトトがもうすぐ死ぬ。」

あれから数日後、イトトが高熱を出し倒れてしまった。しかし、誰もが風邪だと思いファレイもそう思っていた。

「イトトはもう長くない」

院長が皆にそう告げた。ファレイとイトトが出会ってから3週間が過ぎたのにイトトが死ぬ。皆一斉にファレイのせいではないのかと話し始めた。

「そんな、イトトが　！」

ファレイは急いでイトトの部屋に向かう。そこには弱り、痩せこけたイトトがいた。

「なぜだ！　なぜお前が死ぬ！　2週間は過ぎたのに！」

「ファレイ……」

ファレイは泣いていた、初めて人の為に泣いた。それを見てイットはほほ笑む。

「オレの為に泣いて、くれるんだな……ありがとう」

そう言うとイット激しくが激しくせき込む。ファレイは急いで横を向かせ背中を擦ってやる。

「イット！ 死ぬな！ 我の友なのだろう！ なぜ友を置いて死んでゆく！」

「ファ、レイ……オレの名前、呼んで、くれた、な……」

そう言うと目を瞑ってしまふ。ファレイは縋り付くようにイットの手を握り、泣き続ける。

「嫌だ！ 人が死ぬところはもう見たくない！ なぜ皆我を置いてゆく！」

「ファレイ、ひとつ、だけオレの頼み……聞いて、くれ」

ファレイが顔を上げると弱弱しくも微笑んでいるイットがいた。ファレイの涙がふと、止まる。

「オレが、死んだら……オレの、墓、にお前と同じ、名前の……花畑作って……くれ」

「わかった、我は友の……親友の頼みならいくらでも聞く！」

自分の死期を悟ったイットの頼みをファレイは素直に聞いた。

「お前、オレの、こと……親友、って言ってくれ、たな……」

「イット！」

握っていたイットの手から力が抜けてゆく。ファレイの瞳から大粒の涙が零れる。

「イット！」

「楽し、かった……ぜ、ありがとう……ファ、レイ……」

イットの手がベッドに落ち、イットの息が止まる。

「っ、イット！」

イツトが死に、親友を失った。ファレイが僅か10歳の時だった。

\*\*\*\*\*

「イツト、あれから3年が経った。お前は今頃空で笑っているのだろっな……」

「ファレイは薄緑の花”ファレイ”が咲き乱れる中心、イツトの墓場にいた。」

「我は、孤児院を発つ。だが、お前に会いに戻ってくる。」

墓標を眺め、微笑みながら語りかける、すると墓標が一瞬歪んだ。

「ん？ 何事 つ！？」

その歪みが気になり、覗き込もうとした瞬間、歪みに引きずり込まれた。

「なんだ!？」

混乱していると、親友の声が聞こえた。

大丈夫だ、ファレイ。お前は新しい世界に行くんだ。

(新しい、世界?)

新しい世界と聞きさらに死んだはずの親友の声、普通は疑うがファレイは安堵していた。自分を人殺しの様な眼で見る人から解放される、それが嬉しかった。それに

(イット、お前も一緒に来てくれるんだな……)

新しい世界向かい落ちる自分の隣に、成長しては居るが確かにわかる親友のイットがいた。

オレの姿、声はお前以外にはわからないけどな

にっこりと笑ってみせる親友にファレイは微笑み返す。

「行こう、一緒に」

光が見え、その先にある世界”アグセレス”に二人は落ちて行った。

アグセレスとは別の世界、時間軸も環境も全く別の場所から現れる  
ファレイはアグセレスの希望となる為に神の末裔アケナドと呼ばれた。

その世界でファレイは、まさしく世界の希望となる。

新緑の王（ファレイ）（後書き）

いかがでしたでしょうか？

何かリクエストがある場合はどうぞコメントからどうぞ。対応できる限りで番外編で書かせていただきます^^

## 神の愛し子、世界の愛し子：壱

クイネと\*\*\*\*\*

初めての出会いはとても唐突なものだった。ここは草原、旅人でもないといないはずの辺境の地。草原の中に小さな小屋に水場。そして、虹色の光が見えた。

「お前は何？ オイラになんの用？」

「な……なんだ、お前は！」

背中に黄金の光を浴びると虹色に光る翼が生え、そして長く尖った耳があった。そいつは豪華な翼に似合わず、服はボロボロでみすばらしい格好をしていた。

「オイラ？ オイラは……」

あいつは、自分が何者か、と尋ねられると黙り込んでしまった。

「どうした、素性を明かせないのか！」

「オイラは……人殺しだよ」

金の瞳を持つあいつの自己紹介は人殺しだった。



「ふーん、力が暴走して村を崩壊させてしまったから人殺しなのか」  
「うん……」

あいつは自分の名前を言わなかった、名乗る資格はない、とだけ言っていた。

「それなら俺が名前を付けてやる」

「え？ 名前？」

あいつはキョトンとした顔をして子供の様だった。

「ああ、名前がないと不便だからな」

「名前なんて、なんでもいいよ」

昔の事を思い出したのか、うずくまる様に膝を抱えて泣きそふな顔をしていた。

「んー、そうだ、俺の一族の言葉で”神獣”の意味を持つゼフレストにしようー」

「し、神獣！？ ダ、ダメだよ！ そんなすごい名前オイラには……」

俺の発言にアタフタしているあいつはとても面白かった。

「考えてもみる、一撃で村を跡形もなく吹き飛ばす力だ。ちゃんと

制御すれば逆に何千何百の人の命をも救える可能性のある素晴らしい力だ！ 神獣の名に相応しい存在はお前しかいないぞ！」

「そ、そうかな？」

「ああ！ お前は今日からゼフレストだ。いいな？」

「うん、いいよ。」

少し恥ずかしそうに、とても嬉しそうに笑っていた。

「ところでお前は何者なの？ オイラお前のこと何も知らないよ」

「ん？ 俺はクイネ。旅人で、アグナドだよ」

俺の自己紹介にあいつは奇声を上げて驚いていた。

「ああ、クイネ様。どうか私の息子をお助け下さい！」

それは見慣れた光景だった。町に入った瞬間から人が集まってきた俺に頼みを聞いてくれとせがんでくる。いつもと、違うのは俺の後ろに翼を消して普通の人となら変わらない姿のゼフレストがいることくらいだった。

「皆の願いは聞くよ、でも町に入らせて欲しいのだけれど……」

俺が町の人を説得しているとゼフレストがひっそりを耳打ちをしてきた。

「この町は早く出た方がいい」

（そうか、ありがとう）

心の中で返事をする、あいつは納得したのか後ろに下がっていった。

「とりあえず、重症の怪我人や病人から先に治すよ」

そう言うと町の人々は頭を下げて感謝をしてくれた、上辺だけは。

「なんでだよ！ 早く出た方がいいって言ったのに！」

「怒るなよ」

忠告を無視したと思ったゼフレストはかなり怒っていた。

ここは宿屋、頼みごとを終わらせられなかったので一日泊まることにしたのだ。

「いざという時は、お前が俺を守ってくれるんだろ？ 大丈夫さ」

「……でも、オイラは力が不安定だよ」

自信なさ気にゼフレストが項垂れる。

「安定させる方法はないのか？」

「あるよ、でも、それをする前にひとつ、約束してほしいんだ」  
ゼフレストが不安げに俺を見つめてくる。

「なんだ？ 願いなら叶えてやるけど……」

「願いとかがじゃない、ただ……オイラをおいてどこかに行ったりしないしてほしいんだ」

見つめてくる瞳には不安と信頼が入り混じったような光が灯っていた。

「ああ、わかった、約束する。で、安定させる方法は？」

俺が尋ねると、あいつは立ち上がり俺の前で止まった。

「おい？ ゼフレスト？」

「これが、方法だよ」

そう言うときあいつは俺の前に膝き頭を垂れた。

「貴方を我が主と認め、未来永劫の忠誠をここに誓う」

「は……？」

ゼフレストは話ながら俺に近づいてくる。

「これは契約の儀式、オイラは主がいないと力が安定しないんだよ」

「お前、そんなことどこで知ったんだ？」

ゼフレストは考えながら話す、何か話してはいけないことがあるのだろうか？

「知ったんじゃない、この力が目覚めた瞬間からオイラはわかった」

「へー、神からのお告げか？」

「違う」

俺が茶化すように言うと、ゼフレストは真面目な声で否定した。

「ちょっと痛いよ」

「は？」

言うが早いか、俺の手首に噛みつき血を啜った。

「いつてえな！なにすんだよ！」

「契約の呪を唱えてから主となる者の血液を飲まないで契約は成立しないんだよ」

俺はふーん、と関心しながら気になっていることを尋ねる。

「で、神のお告げじゃなかったら何で最初からわかってたんだ？」

「それは、主が人々に望まれて生まれた様に、オイラは世界に望まれて力に目覚めた、だから世界の声が聞こえるんだよ」

ゼフレストはアグナドの事をよく知っていた。俺以上に。

「なんで、そこまでアグナドのこと知ってるんだ？」

「それは世界にアグナドのこと聞いたからだよ、なんでも教えてくれるんだ」

なんだか、プライバシーも何もナイキガシテキタゾ？

「ところで主、なんで服脱いでるの？」

「なんでって……風呂」

俺が上を脱ぐとあいつの目が見開かれた。

「あ、主！ それ……！」

「ん？ どれ？」

あいつが指さしたのは上半身。特に傷があるでも痣があるでもない。

「な、何で……膨らんでるの!？」

「え？ だって……俺、女だぞ？」

俺の発言であいつの目がさらに見開かれる。



**神の愛し子、世界の愛し子・壱（後書き）**

これはゼフレストと初代アグナドが出会い、別れるまでのお話になります。

予定では3話構成になります。

最後はBADエンドですのでお気を付け下さい。



## 神の愛し子、世界の愛し子：弐

体調がおかしい

そう感じ始めたのはいつ頃だったか。

本当に体調が悪いわけではない、ただ体の中で何か渦巻いていた。とても苦しかった、世界が愛しいのに、全てを破壊したいと憎悪と憤怒が渦巻いていた。

「オレ、どうしてしまったんだろう」

自分が怖い、いつか本当に破壊の限りを尽くすような存在になってしまうような気がして。

「いやだ……オレは世界を守りたいだけなのに、助けて」

神様……。

自分に、愛しい世界を守る力を授けた存在に縋る。

その存在が自分を苦しめていることに、クィネは気づいていなかった。

\*\*\*\*\*

「ん……」

いつの間にか眠っていたようで、目が覚めると朝だった。  
隣のベッドでゼフレストが眠っていた。

ああ、また苦しい一日が始まった。

隣のベッドで眠っているゼフレスト、その安らかな寝顔を眺めているとふと、ある感情が湧いてくる。

(殺したい……)

そう思うたびに自分が嫌いになる、それに比例して破壊衝動が強くなる。延々の負の連鎖。

「主……？ 大丈夫？」

話しかけたことに驚き体が跳ねる、幸いゼフレストには気づかれなかったようだ。

「あ、ああ…… 大丈夫だぞ？」

大丈夫なわけではない、しかし、それをゼフレストに悟られなくなかった。

\*\*\*\*\*

「う……ん……」

また、いつもの朝が来た。

空は澄み渡る晴天、小鳥たちが楽しげに空を飛びまわり子供達の笑い声が聞こえてくる。

すべてが忌々しい

はずだった。

そんな感情は湧いてこなくて、心がとても軽かった。

「あれ……?」

おかしいと思いつながらベッドから出ようと横を向いた瞬間”黒”があった。

「おはようございます」

「え」

オレとよく似た紅い髪に、白目のない紅い瞳。人とは違う漆黒の肌。

「おはようございます、ボクはリユーファ、貴女の闇です」

「は？」

抱えていた闇が自我となり、分裂して生まれた存在  
は微笑んでいた。

リユーファ

神の愛し子、世界の愛し子：弐（後書き）

更新遅くなつてすいません^^;

そして3話どころか10話構成になりそうな予感です、すいません・  
・

## 神の愛し子、世界の愛し子：参

あれから長い旅をした。

さまざまな国、地域に出向き人々の願いを聞いて回った。そんな時、闇黒大陸で悪魔クォーリオの国にたどり着いた。

そこで、オレは恋をした。

白銀の髪に、董色の瞳右目は髪に隠れているが蒼い水晶でできた義眼だった。

「アグナド？ そんなものは関係ない。お前はお前、だろ？」

そう言ってくれた初めてで、最後の人だった。

\*\*\*\*\*

悪魔の国・クローツエ国・正門広場

「へえー、これが悪魔の国か……」

悪魔は架空の存在とされていた。

一番の特徴はエルフのように長く尖った耳と縦に割れた瞳孔、そして黄金の瞳。

「ん？ ゼフレスト、そういえばお前悪魔か？」

ゼフレストは悪魔の特徴とほとんどに一致していた。

「違うよ、オイラ最初から瞳が黄金だったんだ」

確かに、周りを見ても金髪ばかり、ゼフレストの様な髪色のものはいない。悪魔は通常は金髪それ以外の色の髪を持つものは差別された。

尖った長い耳と、縦に割れた瞳孔は覚醒した際になったものだろうだ。

「それにしても……周囲の視線が突き刺さるようで居心地が悪いですね」

遅れて歩いていたりユーファがか細い声で呟いた。

「確かに、歓迎されてはいないな」

「貴様ら！ 何故我らの国へやってきた！」

声の主は、鎧を身に纏った悪魔だった。

（まずいな……）

いい予感がしないので、敵意はないことをとりあえず説明しようと思い前に進み出る。

「えっと、オレ達は」

「そいつらは俺が呼んだんだ」

後方から声がして振り返る。

本当にいたのか……

そこには、悪魔の中では絶対に生まれないとされる”白銀”の地面につきそうな長い髪。

黄金ではなく董色の澄んだ瞳、長い前髪が風になびいて隠れていた右目の義眼が蒼く光る。

本の中で昔、人の為に戦い、平和をもたらし、しかし、強さ故に恐れられ”破壊神”と呼ばれた伝説の悪魔。

カルス・ラグロードがいた。



## 神の愛し子、世界の愛し子：参（後書き）

この話で出てきたカルス・ラグロードは本編のプロローグで”天に昇り独りになった”となっている人物です。

そして、クイネの最初で最後の恋の相手です。

この番外連載が終わった後でカルスの伝説の話を書こうと思っています。

神の愛し子、世界の愛し子：肆（前書き）

カルス・ラグロードは言った。

夢と希望を忘れず、自分の中に光を宿していれば俺達は同じ光を宿した仲間だ

その言葉を忘れず、英雄を讃え我らはカルスと同じ光を宿し続ける。

カルス・ラグロード伝説 蒼き水

晶の蝶 最終巻

## 神の愛し子、世界の愛し子：肆

悪魔の国・クローツエ国・ラグロード邸

「ま、適当にくつろいでくれ」

（無理です）

カルス以外の全員の意見が心の中で一致した。  
豪華な家具や絨毯、ティーセット。すべてが一流のものだった。

「すげえ……………」

それしか言えなかった。王宮でもこんな贅沢はできないだろう。

「……………まあ、厄介払いのためだからな、いい物与えて黙らせておこうってことだろ」

そんな豪華な暮らしをしているにも関わらず、カルスの表情は暗かった。

「どついうことだ？」

カルスは英雄なのになぜそんな酷い扱いを受けなくてはならないのだろう、逆に尊敬の眼差しを向けられるべき存在なのに。

「俺の見た目は他の悪魔と違う、それだけでも差別の対象だ。さらに俺は人の子を助けたんだ、悪魔達はよく思っていないのさ」

自分の事なのに他人のことを話しているようにポツリと呟く。

その瞳には本に描かれていたような、夢と希望に満ちた光は微塵もなかった。

\*\*\*\*\*

悪魔は自分達は高貴なる生き物で、人の子はそれ以下、自分たちの為に働いたとしても助けられるべき存在ではないと考えている。

その中でカルスが人の子を助けた。悪魔が怒り暴動を起こす前に、悪魔の始祖 ルカディヴァートウス・コピア・ヴィルデ・グアネリスがカルスを保護した。

そして、カルスを自由にしない代わりに悪魔たちはカルスに手を下さないという決まりができたのだ。

「そんな！ そんなのって……」

人にとって英雄でも、悪魔からすれば目障りなだった。

「俺はこの生活に文句はないし、これで……いいんだ」

納得していると言っではいるが、目が訴えていた外に出たい　空  
を飛ぶ鳥や蝶のように、自由に羽ばたきたいと……。

「なあ、カルス。オレ達と一緒に旅をしないか？」

カルスの願いを叶えたいのもあるが、伝説の英雄と旅を試みたか  
つた。

「旅……か、また人間と悪魔が手を取り合わなければならない時が  
来たのかもな」

旅には了承してくれたが、カルスの言ったことがクイネの心に引っ  
かかった。

「それじゃ、悪魔達に知られる前に支度して出発するか？」

「そうだな、そのほうがカルスがづらい思いをしないのならそうし  
よう」

リユーファやゼフレストも手伝って、旅支度をした。

そして、旅立つ挨拶をするため悪魔の王　始祖・ルカディヴァー  
トウスの元へ向かった。

\*\*\*\*\*

悪魔の国・クローツエ国・始祖の城

「カルス、行くのか」

城について、ルカディヴァートウスに挨拶に向かった。そして、何も話していないのに用件を理解していた。

「ああ、世話になったな」

もう、帰ってはこないよ

カルスは笑ってそう言った。迷惑はもうかけないからと言っているような響きだった。

「そうか……寂しくなるなあ」

髪の毛を弄びながら呟く。心配なのともう会えなくなるのとその両方が入り交じった表情でカルスを見つめていた。

「アグナドよ、なぜ、お前はそんな病んだ体で世界を旅しているのだ？」

「は？」

唐突な質問にマヌケな返事しかできなかった。

何を言っているんだ？

そう言おうとしたのだけれど体が傾いて、言葉を発せなくなる。そして意識が暗転した。

オレの体は徐々に弱っていた。

神の愛し子、世界の愛し子：肆（後書き）

かなり間があいてしまい、申し訳ないです。

リアルがゴタゴタしているので当分こんな調子になりそうです……



## 神の愛し子、世界の愛し子：伍

あれから、オレは回復して旅ができるようになった。

カルスを仲間に加えて旅を続けた、そのうちにオレはカルスが気になるようになった。

オレが倒れるたびに寝ずに看病してくれた、オレが弱るたびおぶってくれた。

優しいあいつにオレは惹かれた。

「どうしたんだ？ クィネ」

あいつは優しく笑いかけてくれた。太陽の光を反射して優しく世界を見守り続ける月のように、冷たくも温かかった。

「カルス……オレ……」

何度も告白しようと思ってあいつと二人きりになってみた。

「どうした？」

でも……

「いや、なんでもない」

嫌われるのが怖くて、言えなかった。

\*\*\*\*\*

三年が経った。

オレは成長し、大人になり体も女性らしくなった。

「魅力的だねえ」

カルスはオレを見て毎回そういった。

そのたびに心臓が張り裂けそうなくらいに飛び跳ねる。顔が真っ赤になり耳まで赤くなる始末だ。

「可愛いねえ」

やめろ、そんな事を言うな。

期待してしまうじゃないか。

告白すれば、他の恋人と同じように過ごせるのではないか。

そんなの、ありえない……。

\*\*\*\*\*

アツツエラ大陸・未開の地

あれからさらに旅を続けた、ときには疫病で滅びかけていた国に向いたり、貧困に喘ぐ貧しい国にも出向いた。

一年の時が流れていた。

そして、オレはあの場所についた。

「これが……未開の地」

オレ達は未開の地の入り口にいた。そこは闇が集まり一種の障壁ができていた。

「ゼフレスト、カルス、頼む」

幸い、光属性のゼフレストとカルスがいたのでオレ達は難なく障壁を突破することができた。

奥へ進んでいくと、急に開けた場所に着いた。そして、眩しい光が降り注いで

綺麗だ……

そこには、樹齢何千年かもわからない真っ白な大樹があり、雲を貫いていて、その根元には淡く発光する湖があった。



神の愛し子、世界の愛し子：伍（後書き）

・・・またかなり空いてしまいました。

本当にすいません、思いつきり罵ってやっってください。

今回はクィネが自分の恋心に気付くお話でした。

この恋が実るかは最終話でわかります・・・？（え

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7489g/>

---

アグナド番外編

2010年10月14日16時36分発行